

日本の光と影をみつめて

新聞記者の自分史の試み

事実の時代に

ちようど新聞記者十年目にあたる昨八一年、一月から七月まで米サンフランシスコ郊外のスタンフォード大学に留学、帰国後の十一月には約一カ月間、サウジアラビアに取材旅行した。超大国アメリカとイスラム教圏の宗主国サウジ。日本にとつては二大主要貿易相手国であり、その市民生活にふれ、考えさせられることが多かった。

アメリカでは学生気分浸ったためか、「予期に反して」スナナリ溶け込み、カルチャー・ショックなど全くといっていいほど感じない。むしろ帰国後、職場復帰した時の方がショックがすさまじく、リハビリに時間がかかった。ふだん自分がドツブリつかっている生活の異常さを否応なく痛感させられたためだろう。

サウジでは記者として飛び込み、「予想以上」に固い異文化の壁に直面し、取材に難航したが、十年來切らしたことの

なかつたアルコールを全く口にしない生活には、何の抵抗感もなく(アル中患者でない証明!)、快適に過ごせた。同時にこの砂漠の王国では、文化が自然環境、風土の所産に他ならないことを思い知らされた。

勝 又 美智雄

(英米語科四六年度卒)

ひるがえつての日本、この十年、社会部記者として日本社会の変化を見つめ、たどってきたつもりではある。そこで感じるのは、六〇年代の高度経済成長期に主流だった「単線進化論」が影をひそめ、人々に確たる自信がなくなってきたこと。過去と現在を結ぶ延長線上に未来がある、と安心して見通すことができなくなったこと。「追いつき、追い越す」べき目標を喪失し、方向が定まらない。既成の権威、価値体系がヒビ割れた、不確実性の時代。個人も、社会全体も、危い足取りで、明日を模索し、「落ちこぼれ」不安に悩んでいる。社会のあちこちでノイローゼ・シンドローム(症候群)が根を張り始め、「心身症」患者が増えている。日本全体が、正气と奮気の間を揺れ動いている感じなのだ。

を続けることだろう。

貿易摩擦に象徴される国際競争力を身につけた日本株式会社の旺盛な活動が光の部分とすれば、それを担う個々人の欲望と弱さとの小は伝票の水増し請求から大は交際費天国、汚職、総会屋とのゆ着に至るまで影の部分構成する。光が影を生み、影が光を支える。影を「腐敗の構造」と否定するのはやさしいが、実は影が地中の腐よう土として、日本株式会社の幹、枝葉の滋養分になっている。いくら非難、否定しようとして、「腐敗の構造」は存在し続けるだろう。

企業社会もやはり政治の世界と同じく、灰色の世界。まばゆいばかりの光とどす黒い影が混在する。その二重構造にたじろがず、しっかりと見据えることが、中嶋嶺雄流「リアルな認識」の基本だろう。「リアルな認識」には人に対しても、組織・制度に対しても、光と影をともし視野に入れる「複眼」が必要不可欠だと思っている。

サラリーマン——雄々しい戦士たち

七九年春から遊軍。本社にいてその日その日の紙面づくりのため突発事件の現場に飛んだり企画ものを担当したり。読者からの問い合わせに答えたり死亡記事をまとめたり。よろず屋のゲリラ集団であり、全く脈絡のないことを同時にいくつも処理し、夕刊段階三回、朝刊段階六回の締め切り時間に

常に追われる馬車馬的「憂軍」でもある。

その中で私は割合、企画ものが多かった。

都知事選に始まって五月連休用レジャーもの、そして日経としても前例のない長期連載「サラリーマン」をスタートから一年半。企業人の人間的側面にスポットをあてたもので、東京、大阪両社会部計四人で担当し、他のメンバーが次々に交代するなかで、「最多出場」を記録した。

取り上げた主なものは、日本NCRを「飛び出した部課長」たち。一流大卒で一流企業を辞めた「若者」たち。筑摩書房の倒産で本の「行商」を始めた人たち、札幌信用金庫の「立候補支店長」たち、「女が自立する時」、上場廃止に追いこまれた明治製糖の「代表取締役」たち、豊年製油の「進路自己申告制度」、天野製菓の「青年重役会」、味の素の「五十歳工場」、社員研修機関に参加した人たちの「自己改造」。

石油ショック後の低成長下、倒産、減量経営、機構改革などドラステックな変化が始まった企業社会。高齢化の進行で年功序列、終身雇用制度が崩れ始め、実力主義時代が到来した。企業が生き残るために何を模索しているか、そこに働く人たちは何を考え、どう行動しているか。サラリーマンの生きがい、喜び、悲しみを彼ら自身の目を通してつづった。

ニュージャーナリズムの手法を取り入れた新しい試み。日経としても前例のない実験だったが、幸い、連載は大変な反